

# ささえあう

2009年  
5月10日  
第9号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

「人が困っていることにお手伝いができる。  
そのことで自信がつかしました」

「こんなに寒いのに、こんなに暑いのに、雨  
の中ご苦労様、ありがとうございますと笑顔で受け取って  
くれたときが一番うれしい」

「大切な事に気づきました。次の日のために  
準備をするという事です」

「この仕事をする事で人を愛する技術も磨か  
れました」

これらの言葉は、今年1月から2月にかけて  
開かれた3地区（大分市・別府市・竹田市）に  
おける「フォーラム」で報告された、地域で働

就労推進ネットワークの取り組みも間もなく  
満3年になります。この3年間は、「精神障  
がい者が働きやすい職場は健常者も働きやすい職  
場」であり「心の病を持つ人たちが安心して暮  
らせる地域は誰もが安心して暮らせる地域」と  
いうことを教えてくれた3年間でした。そして、  
地域の可能性を感じることができるようになっ  
た3年間でもありました。

## 課題は多いけれど

しかし地域の現実はまだまだ課題が山積して  
います。「精神障がい者は働ける」ということ  
は企業の多くにはまだ理解されていませんし、

# 「働く喜び」を原点に

大分精神障害者就労推進ネットワーク事務局長 安部綾子

き始めた当事者の方たちの声です。精神障がい  
がある人たちがどんなにまじめなのか、人に喜  
ばれることでどんなに幸せになれるのか、そし  
て「働く」ということが生きる上でどんなに大  
切なことなのか、心の奥まで伝わってきます。

## 「働くことは生きる喜び」

大分フォーラムで事務局長を務めた白石さん  
の「池田さんにとって仕事をするということ  
は？」という質問に、L.L.C.ハートブリッジで  
働く池田さんはこう答えます。「生きる喜びだ  
と考えています。働くことによって賃金をもら  
うという喜びもありますが、それだけではなく  
人とのつながりや精神的な安定もあると思いま  
す。そしてそれが自分の自信につながり、障が  
いのあるなしにかかわらず人として形成されて  
いくのかなと思っています」。思わず、「支えら  
れているのは私たちの方かも」と思いました。

地域における支援体制も、また連携もまだ不十  
分と言わざるを得ません。

それでも少しずつ、理解は広がり、支援の輪  
もつながってきています。また、介護や農業な  
ど、新たな分野への挑戦も進んでいます。

遅れにあきらめることなく、一つずつ問題を  
解決していきたいと思います。まず、個別的な  
作業だった「支援のあり方」を共同作業にして  
情報を共有することに取り組み、さらに企業を  
含めた地域的な理解を広げていくことが必要だ  
と考えています。

## 4年目、可能性を広げたい！

6月13日には、もう一歩前に進むために第  
4回総会が開かれます。また新たなスタートで  
す。是非とも皆様にご参加いただき、意見を  
出し合って、一緒に可能性を広げていきましょう。

## 3地区（大分市・別府市・竹田市）フォーラム開催しました

ネットワークの2008年度の中心的な取り組みとして、県内3地区における「地域フォーラム」を大分市（1月31日）、別府市（2月20日）、竹田市（2月24日）で開催しました。3地区をあわせると500人以上の参加があり、当事者・家族、支援者、行政、企業、市民など幅広い人たちが「支援があれば働ける」ことを実感し、またいろんな働き方やそれを支える人たち・支援機関があることなどを実感しました。竹田(アンケート)、大分(発言内容)、別府(まとめ) を掲載します。



# 成果を実感！－これから何が？

## 「竹田フォーラム」アンケートより

**当事者** ●まだまだ精神障がいを持っているものが社会の中で働くことは遅れていると思います。当事者として、また仲間同士で声を上げ、各施設の方々とも一緒に発展したいと思います。

**福祉関係者** ●とてもよい情報交換ができました。今後の地域活動に努めていきたいです。●地域の理解、企業の受け入れ体制の確立、障がいへの理解、共存がより必要だと思います。●シンポジウムによって、あらゆる活動のあり方が今までと違って、少しだけですが分かりかけてきました。これからの見方考え方が変わっていったらいいと思っています。地域が理解しなければいけないこと等考えさせられたフォーラムありがとうございました。●今日のフォーラムは大変よかったです。今までこんな機会がございましたので、直接、現場や関係者から体験や悩み、アドバイスなど聞けて私自身とても学ぶことができました。●受け入れ側の理解、障がい者に関する支援体制のPRは大事だと思います。●地域も当事者との関わりでお互い元気になれることをもっと知ってほしいし評価してほしい。

**行政** ●様々な支援を受けることができます。連携をとって就労へむけて動いていきましょう。

**個人・ボランティア** ●専門的な支援機関がある現状を詳しく聞かれて良かった。ぜひもっとアピールしてほしいと思った。さらに地域の理解が何よりも大事だと思う。●精神障がい者が現在あまりにも多いことにびっくりしました。障がい者の方から地域に関わってきてほしい。押しかけて支援はおかしい。●障がい者に対する講演を聞くことが一番いいと思う。回数を増やしてほしい。うつ病、認知症を聞いて大変勉強になりました。●これまでの思いより一歩前進したかな？もっともっと心の病について知る必要があると思いました。今日はありがとうございました。

**民生委員・児童委員・自治会** ●自分たちもこれから障がい者に対する見方を変えなければならなかった。●うつ病等病気をかかえている方は周りの人たちの理解が大切だった。

**その他** ●普通一般の方もこのようなフォーラムに参加できれば人間性が変わるのではないかと思います。勉強したほどに人のつながりも深まります。

# 「精神障がい者の地域生活と就労を考える」 “大分フォーラム”の報告

主催者あいさつ — 森崎大輔実行委員長

## 「働きたい」意欲に適切な支援を

本フォーラムは大分精神障害者就労推進ネットワークの呼びかけで実行委員会が開かれ、大分市内で精神障がい者の地域生活と就労の支援に関わっている方、当事者、家族、行政、保健所、医療関係者、市民など様々な立場の方々が協力して開催することになりました。

精神障がい者の方々の就労意欲の向上はここ数年、目を見張るものがあります。厚労省発表の平成19年度職業紹介状況を見ると、身体障害者、知的障がい者に比べても、新規求職申込件数、有効求職者数、就職件数のいずれをとっても、数値の伸びは著しくなっています。特に新規求職申込件数においては身体障害者は1.2%減少、知的障害者は3.2%の増加ですが、精神障がい者については20.5%増加しています。これまでの長い間、精神障がい者は就労できない、いわゆる福祉的就労の対象ではあっても、一般就労の対象ではないと考えられてきました。しかし、この数値の向上は、精神障がい者は自ら望み働きたいという意識の表れではないでしょうか。

大分市におきましても、来年度から市の嘱託職員を募集していますが、精神障がい者の方から予想を上回る応募があったと聞いています。私も面接官として参加させていただきましたが、そこでもすごい就労意欲を感じました。また自ら申し込みを控えている方でも、適切な援助があれば働くことができる障がい者も多いのではないのでしょうか。

第1部では、働く希望、可能性を示します。第2部では、どのような支援、ネットワークが必要か、シンポジウムで話し合います。精神障がい者がどのような支援があれば就労を継続できるのか。また、企業はどういった支援があれば障がい者雇用への不安が解消されるのか。会場の皆様からも積極的なご意見をいただきたいと思っています。

大分精神障害者就労推進ネットワーク代表あいさつ—藤波志郎代表

## 地域との連携・つながりの大切さを痛感

大分市の関係者の皆様のご尽力により、このように多くの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。1年前、私たちは県内全域を対象にして「支援があれば働ける」をテーマに「就労推進フォーラム」を開催しました。そのなかで私たちは「精神に障がいを持つ者はコツコツと一生懸命働く」「ただ適切な支援が必要である」ということを学びました。そして今度は、「地域で実際に取り組みを広げたい」と考えて動きはじめました。この願いに大分市で応えていただいたのが、実行委員長の森崎さん、事務局長の白石さんをはじめとする若いワーカーの方々でした。そして、県や雇用推進協会、障害者職業センターなどの公的機関、専門機関の方々の援助により今日を迎えることができました。



今日は、実際に地域で生活し働いている当事者の皆さん方、そして現場で支援に関わる方々から報告をいただき、安心して暮らし、働くことができる地域づくりを、どのように進めるかという話し合いが行われると伺っています。私も、日出町で事業所を運営し、地域との連携、つながりの大切さを痛感しています。今日のフォーラムを通していろんなことを学びたいと考えています。

最後に、今日のこのフォーラムが、大分市における精神障がい者への理解と、支援の輪がますます広がっていきますよう念じながら、ごあいさつとさせていただきたいと思ひます。

## 基 調 提 案

# 「意識」と「技術」と「ネットワーク」と — 支援があれば働ける —

三城大介・別府大学文学部人間関係学科准教授

今日、この場で何を話し合うかについて提案したいと思ひます。資料に、「精神障害者は働ける」「支援の重要性」「地域・企業との関わり」という三つの言葉をあげています。この三つの言葉を手がかりにして、皆さんと精神障害者の就労について考えていきたいと思ひます。

私は、障がい者の就労、特に精神障がい者の就労においては、「意識」、「技術」、そして「ネットワーク」という三つのキーワードがあると考えています。まず精神疾患に対する意識の問題です。「精神障がい者は働ける」ということを実現するためには、何よりもまず本人・家族の意思、そして受け入れる地域の意識が重要です。次に「支援の重要性」は、支える技術を確立すること、そして希望する人が支援を受けやすい制度をつくっていくという課題です。そして「地域・企業との関わり」というのは当事者を中心にしたネットワークを地域に広げるといふ課題です。この三つは私のなかではとても関連が大きい言葉です。



そのことを具体的に説明させていただくと、まず、「精神障害者は働ける」のです。ところが、働けるということが地域や企業に伝わっていない、理解されていないという問題がとても大きなものとしてあるのです。ラカンという哲学者が「人は奇異なるものに恐怖を抱く」と言っています。私たちは、わからないものは怖いんですね。でもそれは「わかってしまえば怖いといふことはまずない」といふことでもあります。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」と言ひますね。わからないから枯れた草がお化けに見える、わかってみればただの草花です。知らないといふことが何よりも怖いのです。

では「知らない」といふことをなくすためにはどうすればいいか。それは、当事者の皆さんや私たち支援に関わるものたちが、「知ってもらふ」といふ取り組みをしていかなければなりません。そして、地域のより多くの人に正しく理解してもらふ事がとても大きな課題になってきます。そのためには、まず何よりも私たち自身が正しく知ることが重要になります。このフォーラムの第一の意義はここにあります。

二つ目の「支援の重要性」。これは技術の問題、そして制度の問題になってきます。しかし、実はこれは第一の意識の問題とも密接に結びついてきます。相手のことを正しく理解することができなけ

れば的確な支援ができず、また使いやすい制度を作り上げることができないからです。「利便性」とよく言われますが、誰のための使いやすさなのかが重要です。まず何よりも、利用する当事者のために使いやすい制度でなければ、どんなに立派なものでもいい制度とは言えません。

精神障がいだから、心の病だから、ということでその人を見るのではなく、病気を抱えているその人が今何をしたいのか、本人は何ができるのか、そのために私たち支える側は何ができるのか、そこから出発することによって、その人にあつたいろいろな支援のあり方を作っていく。また、制度のあり方を考えていく。それによって技術は進歩していくのだと考えています。

今日発表される方のなかには、“IPS”、つまり「個別就労支援」という方法、一人ひとりにあつたプログラムを作りながら就労している方もいます。実際に就労されている方々の報告も受けながら、支える技術、支援を活用するための制度について一緒に考えていく。これが二つ目の意義だと考えています。

そしてこの「意識」と「技術」は密接に関係する、とても大切な両輪です。では、その意識や技術をどこで使えばいいのか。どの様に使うと地域生活や就労に結びつけることができるのか。それは特別な場所で使うのではなく、私たちが生活しているこの地域のなかで生かすことが必要になってきます。また、この地域にあつた意識の改革を訴え、技術を作り上げ、それをいろいろな人たちに知ってもらいながら生かしていくということが重要になります。

それを実現するためには、いろいろな方たちが集まり、いろいろな経験を話し合いながらつくっていくことが必要になります。つまりネットワークづくり、これがこのフォーラムの三つ目の意義です。

今日は、「精神障害者は働ける」「支援の重要性」「地域・企業との関わり」という三つの言葉を手がかりにして、テーマである「精神障がい者の地域生活と就労」について、皆さんのご意見も積極的に出していただきながら、大分での就労と地域生活を考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

## 第1部 報告「私の仕事・私の地域」

### —当事者の報告プラス取り組みの報告—

コーディネーター

白石一徳（フライハイム）

報告者

「大分すみれ会・クロネコメール便」「つわぶき園・弁当」「LLC ハートブリッジ・介護事業」

「フライハイム・朝市」それぞれの当事者および担当者

白石 「精神障がい者の地域生活と就労を考える」という視点から、大分市内にある四つの作業所や施設から、現在の状況と課題を報告していただきます。本日お越しいただきました皆さんに大分市内における活動や取り組みを広く知っていただき、自らの暮らしや活動のきっかけやヒントにしていただきたいと思います。また、活動や経験を知ることによって、関わっている利用者やスタッフの意識の変化、また地域の人たちの変化を感じてほしいと考えています。（紙面の都合により、ここでは当事者の声を紹介します）



## 当事者の声

- うれしい言葉は、配達先の方々が「こんなに寒いのに」、「こんなに暑いのに」、「雨の中ご苦労様」、「ありがとう」と、笑顔で受け取ってくれたときが一番うれしいです。
- メール便は天候に関係なく、毎日配らなければならない責任ある仕事です。休んだら罪悪感がわいてきて、何回も自分を責めることになります。メール便の仕事をする事で、今日は暑いから、寒いから今日は休むという甘えの心が消え、規則正しい生活ができるようになりました。目標は、いま玉沢を担当していますが、今のエリアを覚えて、他のエリアも徐々に覚えていくことです。
- 天気が悪くて雨が降ったり雷が鳴っているときに特に大変です。また寒いときは手が凍えてハンドルをうまく持つ事ができません。交通事故に注意を払わなければ行けない事も大変です。友だちが自転車で交通事故にあったことで恐くなったけど克服できました。今は、休日に外に出る事が楽しくて楽しくてたまりません。自動2輪の免許を取る事が最初の目的です。そしていずれは自動車の免許を取り、車で会社に出勤する事です。
- メール便配達という仕事は、細かい相手を思いやる仕事というか心づかいが求められます。私も精神障がい者で他人との交わりが苦手なものですから、下手でも一生懸命やっていたら相手にそれが伝わるものです。メール便はそのことを訓練する場数稽古の道場だと思います。人間一人で生きているのではありません。みんなとの関わりの中かで生きています。この仕事をする事で人を愛する技術も磨かれました。目標は作業所訓練生から一般就労までのチャレンジです。
- 私がよく会うのは天下の JP さん、日本郵便ですが、「同じ運輸業の仲間同士、お互い気持ちよく一緒に儲けましょうよ」という気持ちで道を譲り合い、あいさつを交わしています（笑い）
- 働くことは生きる喜びだと考えています。働くことによって賃金をもらうという喜びもありますが、それだけではなく人とのつながりや精神的な安定もあると思います。そしてそれが自分の自信につながり、障がいのあるなしにかかわらず人として形成されていくのかなと思っています。
- 朝市に参加することになって最初は不安で自信がなかったのですが、買い物に来た地域の方々と会話するようになって、段々と自信がつき、楽しく参加するようになりました。団地で困っている方のお手伝いができることは、自分自身うれしく思っています。これをきっかけにいろんなことに参加してみるとという自信につながりました。現在では訓練生として委託訓練に参加しています。自らいろんなことに挑戦するというのは大きな不安がありますが、しかし多くの方々と接することができて楽しく暮らしています。同時に責任も感じるようになりました。今は、規則正しい生活リズムを続けることで毎日の生活が充実しています。
- 朝市に参加するようになって、人前に出ることが苦手だった自分が、今この場所にいることが不思議でたまりません。この報告発表は自分から手を挙げました。職員に勧められた発表ではありません。でも緊張して後悔しています（笑い）。朝市でいろんな経験をして今の自分がいるように思います。人が困っていることにお手伝いができる、そのことで自信がつかしました。僕も訓練生として委託訓練に参加しています。今までの作業は1日、2時間から3時間くらいでしたが、訓練生は1日4時間以上作業します。自由な時間がなくなって1日のリズムをつかむのに大変でした。でも大切な事に気づきました。次の日のために準備をするという事です。規則正しい生活を心がけて、今後いろんな事に頑張っていきたいと思います。



## 第2部 シンポジウム「ネットワークによる支援へ」

コーディネーター 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介

助言者 大分大学福祉科学研究センター講師（当時） 三輪まどか

パネリスト

介護事業の現場から LLC ハートブリッジ 矢野由美子

医療の現場から 河村クリニック 河村 郁男

デイケアの現場から 大分丘の上病院デイケア 古賀 朋和

生活訓練の現場から フライハイム 白石 一徳 (敬称略)

(発言の一部の紹介です)

三城大介（コーディネーター） 最初の基調提案で、今日のフォーラムの手がかりとして、「精神障害者は働ける」「支援の重要性」「地域・企業との関わり」という三つの言葉を申し上げました。そして続く第一部では、当事者の方たちの取り組みやご発言を聞かせていただきました。これを受けて、前に座っているシンポジストの方たちと、これから地域のなかでどんなことが必要なのかについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。



### まじめで「人の役に立ちたい」、でも機会が少ない

古賀朋和（大分丘の上病院デイケア） 私は大分丘の上病院の精神保健福祉士をしています。当院は大分市の南にある140床の精神科の病院です。私は外来の患者さんが通ってこられるデイケアを担当しています。私どものデイケアの特徴は、70名ほどの方が利用し男女はほぼ同数、平均年齢は37歳と比較的若い方が多くいます。そのなかで、20代から30代の方で今まで仕事をしたことがない、アルバイトもしたことがないという方が半分くらい、あとの半分の方はある程度仕事の経験があるけれど病気をされて今は仕事をしていないという方です。私は3年ほどデイケアを担当していますが、利用者の方と接するなかで、その多くの方はとてもまじめで人の役に立ちたいという気持ちが非常に強いということを感じています。感謝されたい、ありがとうと言われたい。働いて人に感謝されたい、ただその機会がないということだと感じます。今日はテーマに「就労」とあるんですけど、利用者にとって就労は「役に立ちたい」という気持ち、それから「収入が得られる」、あと「家族や周囲の方に求められたいという気持ち」、いろんなことを生かしてくれる場だと感じていまして、それに対してスタッフとして何ができるのかなと感じていました。

去年（2008年）あたりから就労を希望する方を対象に心理教育の一環として「就労」をテーマにした学習を月に2回始めることになりました。そのなかではテキストを使って、自分は何の仕事が向いているのか、今から何をすればいいのかということについて、皆で勉強したり、就労について自分は今どういうところにあるのかということ、グループワークという手法を通じてお互いの意見を交換しあったりしながら進めています。就労したいという願いを持っている人、漠然と考

えている人などいろんな方がいますが、みんなで話しているなかでこの人と一緒だなとか、利用者の中で共有できる部分ができきて、一人ではハローワークに行くのはなかなかできないのですが、あの人が利用している、利用すると聞くと、じゃあ自分もいってみようかとか、一歩踏み出せる人が増えてきたのかなと思います。「一人ではない」「みんなとだったらやっていけるかな」という思いが生まれてきたのはいい変化だなと考えています。またそういうメンバーさんを見て私自身も、一方的に知識を押しつけるだけではだめだなという思いが出てきて、ただ情報を提供するだけでなく、それをどうすれば使えるかということまで突っ込んでやっていかなければいけないのかなと最近では考えるようになってきました。そのためにもこういうフォーラムなどに参加して、使える知識を自分でも身につけていかなければと思っています。

## 地域でのコミュニケーションが大切

白石一徳（フライハイム） 生活訓練施設フライハイムで精神保健福祉士として仕事をしています。フライハイムは生活訓練施設として退院をされた患者さんが単身生活または家庭生活に復帰されるまでの間、自信を取り戻す場として利用されている方がほとんどです。これまで皆さんの援助をさせていただいたんですけど「何か足りない」、この言葉が適切かどうかわからないのですが、利用者の方にメリハリ、生活をする意欲が感じられないまま、日々淡々と送っているということを感じていました。フライハイムは平成13年に開設され、たくさんの方が利用されて社会復帰をしています。施設を出て社会復帰をされた後の方が皆さん生き生きとされているという感じを受けています。先ほどの朝市の報告にもあったのですが、朝市で地域の方と交流するようになって、利用者の意識が変わり始めました。朝市を始めたのが昨年（2008年）の4月からで、月に2回、宗方台の公民館、それから松が丘の公園を借りて現在行っているんですけど、利用者の意識ということ言えば、人の役に立つ、お手伝いができるということによって、利用者のやる気、生きているという実感ができて生活にメリハリができてきたような感じを受けています。

専門のスタッフ・職員だけでその人を支えるのではなく、地域全体で支えていくことが大切なのではないかと感じています。

## ケアの仕事に向いている。でも苦労も

矢野由美子（LLCハートブリッジ） ハートブリッジは、長年在宅ケアの仕事に携わってきたスタッフが集まって一昨年(2007年)の7月に作った会社です。家族の成長に合わせて必要なときに必要な支援を受けられる仕組みを作りたいという思いでした。介護保険による高齢者福祉のサービスと障害者自立支援法による事業所の指定を受けています。ヘルパーなどの訪問介護、居宅介護、訪問看護、行動援護、それに会社独自で行っている心と体のコンサルタンティングサービスや子育てから介護までのファミリーケアなど、“制度のすき間”のお手伝いを通して家族全体を支える仕組みを、働く人の目線で作りたいという思いで取り組んでいます。

就労支援については、「なぜ？」と言われることが多いんですけど、働く人の応援をするなかで、働くことの応援もしなければいけないなと気づいて取り組みました。心の病気のために離職中で、これから一般就労をめざす方を対象に行っています。特にその方の強さ（スト





レングス)をみたときに、「病気で苦労された方は人にやさしくできる」という強さを見つけまして、ケアの事業に向いているのではないかなと考え、ハローワークに求人を出したことがきっかけです。高齢者の介護の枠に入らない犬の散歩、電気を消すこと、草取りなどのお手伝いから始めて、週に1回から2回、1時間からスタートして徐々に時間や内容を増やしていきます。今では約20名の方に働いていただいています。お手伝いの方法は、高齢者のケアマネージメントをヒントに介護予防プランのポジティブプランというのを参考にしながら、三城先生のアドバイスをいただいて個別就労支援（IPS）に取り組んでいます。

私たちは看護職ですから訪問看護ステーションとして関わっていることがメインですけど、精神科医の先生の指示を一番大事にして、それに基づいてご本人の希望、“なりたい自分”をイメージしていただいて、リーダーはご本人になって、その人のやりたい仕事を目標に、それに向かって個別にプランを立てて、お手伝いをしています。社内チームと社外チームを編成して、共同してケアカンファレンスを行っていて、失敗も多いんですけど、一般就労、雇用保険・健康保険、厚生年金に入れるようになるのを目標に、少しずつですけど進んでいこうと思っています。

まだ始めて1年足らずなので、いろんな課題がありますが、うちでは「患者さん」ということではなくて、“病気を抱えて働くスタッフ”ですよということを、スタッフの皆さんにはお伝えしています。企業で働く場合には甘えは許されないの、そうしたなかでやっていくためにはどうすればいいかということも私たちも自問自答しながら動いていますが、時々、ケアの立場か上司としての立場かどっちなのかわからなくなって、ネットワークのみなさんに応援いただきながら取り組んでいる発展途上の会社です。

## 安心できる地域、安心できる職場になれば

河村郁男（河村クリニック） 私は診療所を10年位前からトキハの近くに開いています。30年前から精神科に関わっていますが、精神科医療は患者さんにとってマイナスのことを私たちはずっと続けてきたのではないかと感じていて、それを変えていかなければと思ってやってきました。例えばどういうことかということ、病気になると孤立していくんですね。孤立していく本人を支える家族も孤立して行って、地域も受け入れない。病院も昔は入院中心だったので隔離する傾向があった。私はそういうことが患者さんの力、地域で生活する力であるとか、仕事をする力であるとかを奪ってきたのではないかと考えてきて、どんな風に関わろうかなとやってきました。とりあえず今、クリニックのなかでやっているのは、安心できる場所としてクリニックの場があればいいな、そのなかで集まってくる人がスタッフとだけでなく、お互いの交流があったり、相談できる雰囲気があったりすることがとても大事だと思っています。

今日は就労のことがメインのテーマなんですけど、大半の患者さんはある程度就労しようとしてがんばって、そして再発をして、またがんばって再発をして、それを何度も繰り返しているという人が結構多いと思います。そのなかで自己評価も下がっていくし、まわりの支援もないということが多いのです。私はそれは、働き方を考えると、



孤立しないような場を作るといふ、社会の問題ではないかと思っています。

「精神障がい」っていったい何だろうと考えたときに、身体障がいの場合には障がいを固定したものととらえてそこから考えていくと思いますが、精神の場合には急性期から落ち着いてきて何が固定なのかということがよくわかりません。むしろ、そういう関わり方をしたらとてもまずくなる。いい環境で安心できる地域、安心できる職場であれば、たぶん再発しないでいろんなことを自分で決定していろんなことをやれるということ、私はずっと医療をやってきて確信しています。ところがそれが今、なかなかできないというのが現状だろうと感じています。今日いろんな方がお見えになっていますが、いろんな就労できる場所とか企業とかが増えてきたら、もっといい世の中になるだろうなと思っています。

それと関わる時に大事にしなければいけないことは、私たちは精神医療で強制医療もでき、本人が「いや」といっても入院させたりできる権限を持っています。それは、ある意味で自己決定権を奪ってきたと思っています。自己決定することをとて大事にするような関係のあり方が、いろんなことを一緒にやっていくときにとても大事なやり方だろうと思っています。孤立していった人は情報が少ないので、情報がある人よりも判断が難しいと思うことはあると思います。孤立してなければ、友達とか近所の人たちとか職場の誰某に相談できていろんな情報が入ります。しかし、そういうことを奪われている人が結構多くいます。それは私は病気のせいではなく、ちゃんと情報を伝えて安心できる雰囲気をつくることで、本人にあった正しい判断ができると思っています。

私は、「精神障がい者は働ける」と思っていますが、ただ安定して働くためには、会社も地域も医療機関も、あらゆるところが変わって行かないと難しいのかなと思っています。支援ということでは、自分の住んでいる地域（近所）で孤立していく状況をどうつくらないかが大切だと思います。そして小川さんが言われたことでうれしかったんですが、心の交流があるところで働き続けられる企業が増えてほしいと思いました。普段は診察室で朝から晩まで診察で周りが見えないんですが、今日は夢を持っているという人たちにもお会いできてとっても嬉しかったです。

## 大切なのは「一人ひとりを見ている」こと

三輪まどか（大分大学福祉科学研究センター） 私は、大分大学福祉科学研究センターで平成19年に大分市内の団地の調査を行ったことをきっかけに、フライハイムの「朝市」に“参与観察”というかたちで関わらせていただきました。朝市が行われることによって、施設の利用者と住民の交流だけでなく、住民同士の交流も深まっています。住民同士の会話が生まれ、地域を立て直す効果もあったと感じています。

今日のお話を伺って、就労には“成功の秘訣”があるように感じました。それは、「一人ひとりを見ている」ということです。メール便も、弁当を作って配達することも、介護サービスも「1対1」の関係の中で人を見ている。支援する側にも先入観がない。その人と個別に向き合って、この人はどういうことが向いているのだろうか、どういう条件が必要だろうかということを一歩懸命考えていらっしやいます。労働法の世界ではこれまで「労働者対使用者」という構図がありました。働く人を一つの固まりとみて、同質な人を集めて労働条件、労使交渉をするという考え方です。それを一人ひとりにすると、企業は非常にコストがかかります。しかし今は、行政も含めて「どうすれば受け入れられるのか」という対策が始まっています。課題は多いと思いますが、一歩を踏み出すことが大切だと思っています。

（紙面の都合上、当日の発言の一部を編集部の責任でまとめさせていただきました。詳しい報告は現在作成中の「報告集」に掲載する予定です。）

# 結論は、 「関係者の連携や地域のネットワークがあれば、十分に働くことができる」

別府フォーラムは、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構大分障害者職業センターが主催する平成20年度地域職業リハビリテーション推進フォーラム、そして、別府市障害者自立支援協議会・就労部会が共催する別府市の事業としても位置づけて、2月20日に別府市・ビーコンプラザ・中会議室で行われました。

基調講演「精神障がい者を含む障がい者の就労支援について」として、福岡市障がい者就労支援センター所長の黒田小夜子さんに、福岡市が設置する障がい者就労支援センターにて、コーディネーターとジョブコーチがハローワーク等との連携で行う精神障がい者を含む障がい者の就労支援の実際について聞き、当事者の体験発表を経て、別府市内の企業、支援機関が行う別府市の就労支援のプロセスについて考えました。

## シンポジウム「精神障がい者

就労支援のプロセス」は、別府大学文学部人間関係学科、准教授の三城大介先生の進行で、①三菱商事太陽株式会社取締役総務管理部長・山下達夫②障害者地域生活支援センター泉施設長・渡邊喜美子③大分県厚生連鶴見病院精神保健福祉士・三好陽子④社会福祉法人太陽の家ワーカビリティ事業部職業訓練課長の西山英樹の各氏からのコメント、更に参加者のうち就労支援を行っている福祉施設、精神障がい者雇用を実践している企業の代表取締役からコメントがありました。

社員の理解を深めるための研修、社内ジョブコーチの配置、現状確認のための関係機関との定期的なミーティング、金銭管理、服薬管理、生活リズムの構築、コミュニケーション能力の向上等、企業での環境整備や支援機関、行政の役割など幅広い視点からの討論がなされ、結果として「関係者の連携や地域のネットワークがあれば、十分に働くことができる」という事実を、大きくアピールすることができました。



大分精神障害者就労推進ネットワークはまもなく結成から4年目を迎えます。この3年間は、先進地に学ぶことで「精神障がい者は働ける」という確信を深めるとともに、必要な支援のあり方を模索する日々でした。そのなかで、地域には様々な社会資源や人材が存在し、大きな可能性があることが私たちの共通理解となってきました。

## 6月13日（土）、第4回総会を開催します 記念シンポジウムも同時開催

昨年度の三地区（大分市・別府市・竹田市）における「フォーラム」開催は、その可能性を地域の関係者の連携によって地域で具体化する着実な一歩となりました。それぞれの地域の特徴に応じて、弁当配達・メール便・朝市（都市部）、草刈り・農業支援（過疎地）、さらに介護など様々な働く場を開拓する事業所、そして当事者や事業所を地域の枠を越えて支援する公的な機関や人びと — 様々な報告によって、私たちが願う「安心して暮らせる地域づくり」が、より具体的に見え始めてきたように感じています。

しかし、まだまだ厳しい現実があります。地域や企業の受け入れも、支援体制も決して十分とは言えません。今も地域で支援を受けられずに孤立している人もいます。私たちは、これからの取り組みの重要性を痛感しながら、第4回の総会と記念シンポジウムを行います。是非ご参加ください。

- (1) 日程 6月13日(土) 13時30分～16時（記念行事は14時開始予定です）
- (2) 会場 別府大学 メディア教育センター 別府市北石垣82（駐車場はグラウンド）
- (3) 内容

- ①第4回定期総会
- ②総会記念行事

講演 「ネットワークが広げた可能性」

三城 大介・別府大学文学部人間関係学科准教授

シンポジウム 「当事者・地域・ネットワーク」

コーディネーター 三城 大介・別府大学文学部人間関係学科准教授

シンポジスト 青柳 智夫（大分障害者職業センター・別府フォーラム）

白石 一徳（生活訓練施設フライハイム・大分フォーラム）

古賀 朋和（大分丘の上病院デイケア）

竹田フォーラムの報告も予定しています。

問い合わせ先 事務局 097-527-5443（「リフォーム夢舎」安部）

**編集後記** 4月24日、宇佐市の「就労支援ネットワーク」に参加させていただいた。2007年にスタートして今年が3年目になる。当事者、家族、福祉関係者、保健所、ハローワーク、養護学校の先生、そして行政からも4名など、地域の幅広い人たちが自ら希望して参加している。ある母親は「子どもの就労のために勉強したい」と個人で希望して参加した。そのような場を行政が準備したということに、驚くとともに感動してしまう。大分・別府・竹田でも、「働くことで自信がついた」という当事者の声とともに、高齢化・過疎化した地域では手助けを求めているという現実が出された。就労を進める意義は大きく、方法も見えてきた。あとは「一歩を踏み出す」（三輪先生の言葉）こと、そして働きたい人を支え合うネットワークを地域に広げていくことだ。（〇）